



Title	理工系の学生のための英語プレゼンテーション・スキル養成講座実施報告
Author(s)	スミス, 山下 朋子
Citation	大阪大学英米研究. 2010, 34, p. 87-98
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99343">https://hdl.handle.net/11094/99343</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 理工系の学生のための英語プレゼンテーション・ スキル養成講座実施報告

スミス山下朋子

## 1. はじめに

大阪大学・吹田キャンパスに於いて、平成21年8月31日から9月11日まで10日間にわたり、理工系の学生を対象に英語のプレゼンテーション・スキル養成講座が開講された。講座は、財団法人日本英語検定協会と大阪大学外国語学部英語専攻（言語文化研究科言語社会専攻英語部会）の共同研究として行われるパイロット事業である。国際的な舞台での英語での研究発表やプレゼンテーション、質疑応答を想定した集中的な訓練を行い、どのような教材、教育方法が効果をあげるのかを調査することを目的としている。本講座は、プロジェクトの一環として初めて実施されたものである。

## 2. 受講生

受講生は、表1に示したように、工学研究科・工学部の大学院生・学部生が中心で、さらに大阪大学の卒業生（工学研究科出身）の社会人、医学部から1名加わり（医師として勤務しながら博士課程在籍中）、合計13名となった。国籍も日本人だけではなく、留学生（中国2名、韓国2名）も含まれ、専門分野も様々で、バラエティーに富むメンバー構成となった。事前に自己申告してもらった受講生のTOEIC等のスコアは、555～840点と幅があり、

英語のレベルも差があるように見受けられた。

表1：学生の基本情報

#	学科専攻	学年	国籍	性別
1	応用自然科学科（応用物理）	B2	韓国	男
2	応用理工学科（機械工学）	B3	日本	男
3	応用自然科学科（応用化学）	B4	中国 <sup>1)</sup>	男
4	地球総合工学科（建築工学）	B4	日本	女
5	マテリアル生産科学専攻	M1	韓国	男
6	ビジネスエンジニアリング専攻	M1	中国	男
7	機械工学専攻	M1	日本	男
8	ビジネスエンジニアリング専攻	M2	中国	男
9	知能・機能創成工学専攻	M2	日本	男
10	環境・エネルギー工学専攻	M2	日本	男
11	地球総合工学専攻	D3	日本	女
12	公務員（工学研究科卒）		日本	男
13	医学系研究科		日本	男

### 3. 講座の概要

講座は、全て英語で行われた。休み時間でも英語のみで話す学生もあり、英語漬けの10日間であった。実施は、月曜から金曜日の9時から16時10分までというスケジュールだった。講座を担当した講師は、財団法人日本英語検定協会からの派遣で、製薬会社の企業等でビジネスプレゼンテーションを主に指導しているドイツ人とイギリス人の2名であった。前半の5日間は、ドイツ人講師が、そして後半の5日間はイギリス人講師が担当した。

受講生は、あらかじめ自分たちが自由に題材を選んだプレゼンテーションを用意することが課題として与えられていた。そして、第1日目と2日目に各自準備したプレゼンテーションを発表し、その後も様々な形を用い同じ内

容、又は異なるトピックでミニ発表の練習を何回も行った。講師は、発表終了後に、各学生に対するコメントを述べた。学生同士でコメントやフィードバックを行う時間も作られた。以下、主な内容を列記する。

- ① 準備してきたプレゼンテーションを全員の前で発表。
- ② 講師によるプレゼンテーションの基本についての説明（その後も要所にレクチャーを含める）。
- ③ 3～4人のグループに分かれ、コンピュータのPPTを見せながら、学んだ表現で発表の練習。
- ④ 受講生同士でインタビューをして、分かったことを全員の前で発表。
- ⑤ 受講生がプレゼンテーションの講師となり、プレゼンテーションの基礎を発表。
- ⑥ 日本の印象についてのプレゼンテーション。
- ⑦ 課題のプレゼンテーションを各自修正後、再発表。

また、発表の基本についての講義と発表練習以外にも“Check In”という発話の練習の時間が設けられた。この時間には、あらかじめ決められたトピックに関して簡単に報告するのだが、ただ単に話すだけではなく、発音矯正や文法の誤りを指摘、特定の語彙を学ぶ時間としても利用された。

#### 4. 英語のレベル

講座終了後、受講生のうち12名がSTEP BULATSを受験した。このテストは、STEP（財団法人日本英語検定協会）と英国ケンブリッジ大学の語学試験機関であるケンブリッジESOLが共同開発したもので、ビジネスに特化した英語能力テストである。内容がビジネス向けであることと、受講生は事前に全く準備をせずに受験したため、結果は低めに出るのではないかと予想されたが、自己申告した英検やTOEICの結果とほぼ同レベルの判定が出た。受

講生のレベルは、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の判定レベルにおいて、全員中級であるB1～B2と判定された。以下に、受講生のレベルの能力記述文とそれに対応するTOEICのスコア、英検のレベルを記載する。

表2：TOEIC・英検・CEFR 関連レベルと能力記述文<sup>3)</sup>

レベル：B2 TOEIC 785 点 英検準 1 級	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialization. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.
レベル：B1 TOEIC 550 点 英検 2 級	Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst traveling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly give reasons and explanations for opinions and plans.

12名の受講生は、BULATSのスタンダードテスト、スピーキングテスト、ライティングテスト3種類を受験した。スタンダードテストでは、リスニング、リーディング及び語彙・文法の知識が測られた。また、スピーキング・ライティングテストでは、実際の発信能力が測定された。表3に結果の一覧を示す。なお、各自のスコアは掲示せず、CEFRのレベルのみを示す。

表3に示したように、スタンダードテストとスピーキング・ライティングテストの判定結果が各学生によってばらつきがあるが、ライティングがその他の判定より低い傾向（A2を含む）があるのが分かる。これは、学生がビジネス関係のライティングに慣れていないせい、又は制限された時間で実施するライティングのテストそのものに慣れていないためではないかと思わ

れる。一方、日本人が同じく苦手とするスピーキングの方は、A2判定された受講生はいなかった。今回の取り組みでは、受講前に試験を実施していないので、この講座の効果がスピーキングテストの結果に表れるかどうかは不明であるが、10日間英語環境におかれてプレゼンテーションの特訓を受けた場合、レベルも上がる可能性は高いと考えられる。今後は、スピーキングテストを事前・事後に実施して結果を比較するのも興味深いと考える。

表3：BULATSの結果とその他のテスト結果<sup>4)</sup>との比較

Student Number	英検 級	TOEIC score	TOEFL score	Standard CEF	Speaking CEF	Writing CEF
11		835		B2	B1	B1
10		735		B1	B2	A2
12	2 級	710		B1	B1	B1
6		700		B1	B1	B1
1		700	547	B2	B1	B2
5	2 級	635		B1	B1	B1
4		615		B1	B1	B1
3		615	480	B1	B1	A2
2		595		B1	B1	A2
13	準 1 級			B2	B2	B1
9				B2	B1	B1
7				B2	B1	B1

英語のレベルに関して、B1 からB2 と中級レベルの中で幅がある受講生層であったが、担当講師は2名ともレベルの差は特に問題なかったという意見を述べた。確かに、スピーキングのレベルには差は見られたが、習得しなければならないことは、プレゼンテーションのスキルであったので、レベルの差が各々の学生の習得の弊害にはならなかったと考えられる。しかし、今後、同様のクラスを開講する際は、レベルを2つに分けて実施することも可能である。レベルを分けることで、授業の効率が向上する余地はあると思わ

れる。

## 5. アンケート調査の結果

受講終了後、受講生にアンケート調査を実施し、講座に対するフィードバックを得た。今後の参考になると思われる5つの設問に対する回答を以下にまとめる。

### ① 講座に対する満足度

非常に満足	6名
かなり満足	7名
まあまあ	0名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名

まず、講座全体に対する満足度については、以上のように、全員満足しているという評価だった。

### ② 実施期間について（月～金、9時～16時10分）

#### a) 丁度良かった：7名

- 4回生なので、ちょうど良かったと思うが、M1はインターンシップがあるので、2週間以上となると大変かと思う。
- 全てちょうどよかった。学ぶだけなら1週間くらいでもよいが、実践の時間がないと、まったく違う環境で成果を発揮することはできないと思った。2週間という時間は院生の参加を難しくすると思うが、中途半端に学んでも、外に出たときに成果を出せず、意味がなくなると感じる。参加者が限定的になっても今の形がベストだと思う。
- 所属するサークルの合宿と日程が重なっていなかったのが大きかつ

た。…2週間1日4コマは長いように思えたが、終わってみると充実しながらもあっという間だった。ほどよい長さだったと思う。

長かった：3名（社会人2名と博士課程後期の学生）

- 忙しい人でも参加したい人がいると思う。5日間でもいいかもしれない。
- 社会人としては、2週間は長かったが、学生さんたちにとってはちょうどいい長さだったのではないと思う。
- 2週間の間、この講座以外の活動に対して時間を振り分けるのが難しかった。午前中だけ等、もう少しコンパクトにまとめてもらえると、もっと多くの人が参加しやすくなると思う。

短かった：1名

- 6週間、毎日6時間だったらよい。

無回答：2名

次に、実施期間については、学部生や修士課程の学生にとっては、10日間で良かったという意見が多かった。社会人の2名や博士課程後期で忙しい学生にとっては、10日間は長かったようだ。今回の講座は、平日毎日朝から夕方まで実施したが、実験などを行う工学系の学生にとってこのスケジュールは参加が難しい場合も多い。実施期間やスケジュールも対象学生によって調整する必要があるだろう。

### ③ ビジネス系のプレゼンを学んだことについて

設問文「今回の講座は一般的な（特にビジネス：理系の会社）プレゼンテーションのスキルを中心に指導しましたが、ここで学んだことが、直接国際学会の発表に役に立つと考えますか。他にもっと工学系に特化したプレゼン



のスキルを学んでみたいですか。』

- 効果的なPPT、話し方、transition、eye contact、gestureなどは学会のプレゼンでも役に立つものと思われる。しかし、それぞれの学生の専門分野が異なるため、お互いにプレゼンの内容をかなり単純化していたため、国際学会では直接使うことができないと思う。学会のプレゼンにおいては、短い時間にもっと専門的な内容を話さなければならないため、ワンスライド・ワンアイディアというのは少し難しいように思う。
- 学会発表は、通常細かいセッションごとに行われ、話すテーマについて前提知識が豊富な人達が多いため、そういう人達にたいして通用するのかどうかということまでは分からなかった。ただ、気を配るべきポイントが新たに学べたので、度合を変えて応用が効かせられると思う。博士後期課程進学希望者は少数派なので、今回のように理系の会社に就職した後のことを念頭においた講座のほうが喜ぶ人が多いと思う。
- 工学系に特化したプレゼンとビジネスにおけるプレゼンは同類項ではなくれないと思う。また、工学系に特化した、と言っても、機械系や材料系、建築系など、分野によってプレゼンの仕方がそれぞれ違ってくるのではないだろうか？ 私個人の意見では、今回の研修で得られた技術を使って、自分なりに工学系の学会で発表するということがいいのではないと思う。私は今回の講座で得られた技術が将来十分に役に立つものだと思うし、そこから各人が工夫して自分のスタイルをつくればいいと考える。
- 敢えてビジネスライクなプレゼンスキルを学ぶことで、逆に普段の国際学会でのプレゼンに活かせるかもしれないと思った。
- 一般的なプレゼンのスキルが分かればあとは実践あるのみだと思うので、充分役に立つと思う。工学系といっても領域が広すぎるし、根っ

この部分はどれも同じく今回のような講座で学べると思う。

- 一般的なプレゼンテーションだとしたら、講座の内容は自分の研究内容で発表するではなく内容を統一して発表するべきだったと思う。この方法なら皆は他の受講生から学ぶことができるし、先生の指導もしやすいと思う。もし工学系に特化したプレゼン講座があれば、そこで研究についての発表はしっかり練習してもよいと思う。
- 直接国際学会の発表に役に立たないが、工学系に特化したプレゼンのスキルは研究室の教授から学ぶので問題ない。今回の内容に満足している。

ビジネス系のプレゼンを学んだことについては、以上のコメントのように、一般のプレゼンテーション・スキルで満足できるというコメントが多かった。ビジネスにしても学会発表にしても、プレゼンテーションで大切なものは同じではないかという意見には、同感である。これは、筆者の個人的な意見だが、講師が紹介した用語には明らかにビジネス向けのものが一部あり、ある程度このような用語を学会発表向けに修正して指導すれば、汎用性も高くなると思われた。

#### ④ 不足していたものや改善点

- 先生からのフィードバックがもっと欲しかった（3名）
- もっと少人数であれば学習効率が上がると思う。（2名）
- 少し休憩が多すぎた。（1名）
- Check Inが全体的に長かったり、待ち時間（他の受講生の話を聞く時間）が長すぎた場合があった。（1名）

改善点としては、教員からのフィードバックと人数の調整を今後の課題としたい。Check Inの長さも人数調整ができれば、問題がなくなると思われるが、13名というのは決して大人数ではないので、コストパフォーマンスを考

慮すると適当な数だと考えられる。

⑤ 一番よかった点

a) プレゼンテーションのスキル学んだこと（7名）

- まったく違うプレゼンの仕方を学べた、ということ。今回の講義を受けて、大きく自分のプレゼンの仕方が変わると期待している。普段、日本の学会の形式のプレゼンしか知らないため、それが当たり前になっている環境では非常に貴重な講義だったと思う。特に院生に必要な講義だと感じた。
- このようなトレーニングを受けた日本人はほとんどいないから自信を持っていいんだと思えるようになったこと。また、後輩に指導するに当たり、適切な意見を伝えられると思う。
- 二人のスタイルの異なる先生から講義を受けることができたこと。

b) 異文化コミュニケーション（3名）

- 留学生と日本の学生の両方と話げできたこと。日本人と外の文化との違いが少し見えたように思う。

c) 英語そのものの勉強（2名）

- 2週間、強制的に英語を話さなければならない環境に身をおいたこと。英語に苦手意識があったので、少しだけ和らげることができた。また、他学科の積極的な学生に会うこともでき、刺激を受けた。
- 2週間、長い時間英語に触れられたことが一番良かったと思う。ネイティブの方と話す機会は今まで全くなく、とにかく英会話をするということが初めてだった。

d) 学習スタイル（1名）

- 学生間のフィードバックができたこと。先生と学生、また学生と学生

の相互協力があったこと。

以上のように、講座の本来の目的であるプレゼンテーションのスキルを学ぶこと以外にも、異文化コミュニケーションや英語そのものの学習や学習スタイルなどに関しても評価するコメントがみられた。

## 6. おわりに

10日間にわたり部分的ではあるが毎日授業を見学した中で、感じたことをまとめたい。まず初めに、最初と最終の発表を比べると、プレゼンテーションの質が非常に高くなったのは明らかであった。例えば、プレゼンテーションの基本であるアイコンタクトが十分できている人は、初回のプレゼンテーションではほとんどいなかったが、練習を重ねるうちに最後にはある程度できるようになっていた。また、難しいQ&Aの部分もかなりスムーズにこなせるようになっていた。繰り返しミニ発表等で練習したので、体得できたのではないと思う。期間に対するコメントも10日間が丁度よいと答える学生が半数を越えたのも頷ける。

また、留学生と日本学生が混じって学習したことは、非常に有効であったと思われる。学生同士のコメントは、特に留学生から日本人に対してはつきりと適切に行われていたと思う。留学生の多くは、相手に遠慮するというのではなく、そのような態度が講座を活性化させた一つの要因だと感じられる。また英語を話す相手はいつもネイティブスピーカーとは限らない。受講生のコメントにもあったが、いろいろなアクセントに慣れるという点でも、留学生や講師の先生もドイツ人、イギリス人と国際色豊かであったことはよかったと思う。

夏季休暇の10日間という時間を割いた受講生は、英語の学習意欲が非常に高い学生だったと言える。講座終了後も、受講生同士（そして講師とも）コンタクトを取り続けている。また、11月2日には、受講生の中から3名が希

望して、プレゼンテーション・コンテストに参加した（財団法人日本英語検定協会と大阪大学外国語学部英語専攻主催）。講座終了後から約2ヶ月経っていたが、講座で学んだことを十分生かしてよりレベルの高いプレゼンテーションができていたと思われる。

さらに、11月10日からは、毎週1回昼休みに集まり、英会話の練習が始まった。これは、「英語を使う機会が欲しい!」というニーズから学生が自主的に始めたもので、100%学生主体で行われている。毎週5～6名の参加で、自分達が決めたトピックで留学生にも参加してもらい実施している。10日間の講座の終了日に、これからも英語を勉強したいと話していた学生が、自分達で道を切り開いているのは、非常に頼もしいことである。今後もそういった学生の活動をサポートしていきたい。

## 注

- 1) 国籍は中国であるが、留学生ではなく、日本で育った学生である。
- 2) CEFRとは2001年に欧州評議会（Council of Europe）が制定したヨーロッパにおける外国語学習到達度を評価する共通のガイドラインである。レベルは、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6つに分けられ、「～ができるならばレベルはこうである」という学習者の「できること」つまり、例示的能力記述文（Can-Do Statements）からレベルを明らかにする方法である。
- 3) [http://www.ea.toeic.eu/fileadmin/free\\_resources/ETS\\_Global\\_master/TOEIC\\_L\\_R\\_can-do\\_table.pdf](http://www.ea.toeic.eu/fileadmin/free_resources/ETS_Global_master/TOEIC_L_R_can-do_table.pdf)より抜粋。英検の情報は筆者が追加した。
- 4) 英検やTOEICの結果は全て自己申告である。